

あ  
の  
は  
ら  
に  
十

は  
ら  
も

桜  
水

と  
心

芭蕉翁生誕三八〇年記念

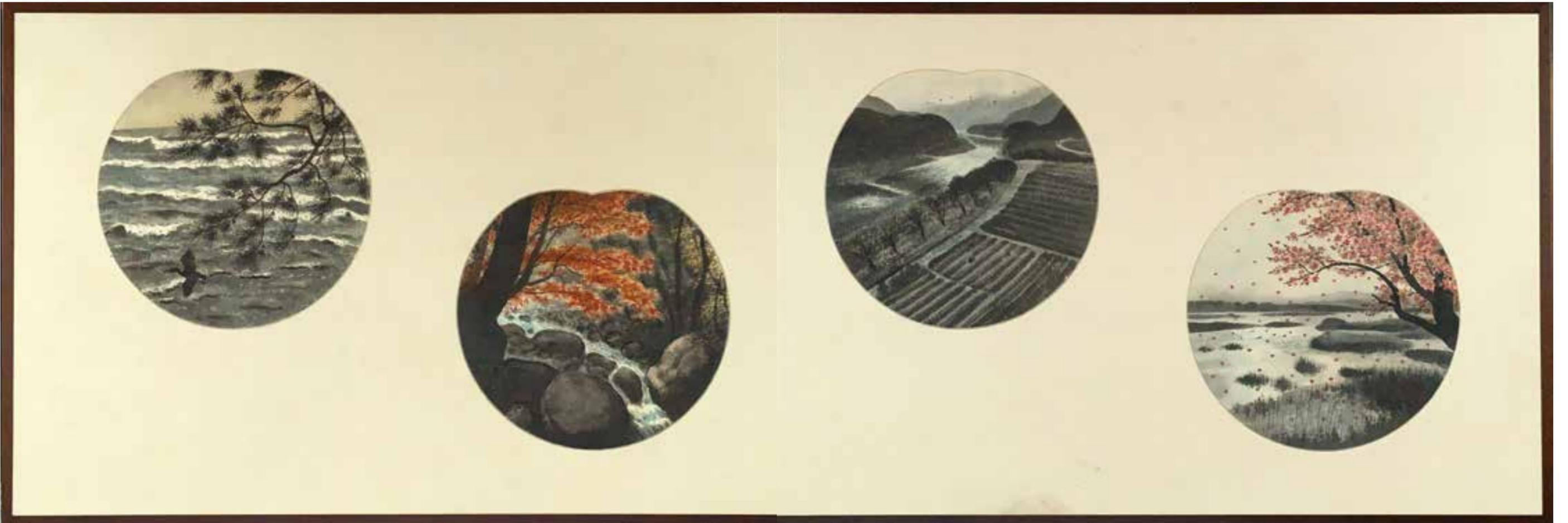
芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎 合同企画展

絵  
が  
先  
か、

俳  
句  
が  
先  
か

— 伊賀市ミュージアム青山讃頌舎 —



穂月明作  
四季流水貼雜屏風

ご挨拶

芭蕉翁生誕三三〇年を記念して、伊賀市の二施設、芭蕉翁記念館と伊賀市ミュージアム青山讃頌舎による連携展示を開催します。芭蕉の俳句と画家穂月明による現代絵画をあわせて鑑賞することで、お互いの魅力を高めあうことを目的に、新しい展示の方法を試みました。

芭蕉翁記念館では、芭蕉の真筆を含む作品とあわせて、穂月明作品をパネル展示し、絵画と文学の響き合いを楽しんでいただけます。また、伊賀市ミュージアム青山讃頌舎では、穂月明作品とあわせて、芭蕉の俳句を紹介し鑑賞していただけます。

今回展示する俳句や絵画は、関連するものとして創作されたわけではありませんが、異なる人物、異なる時代に生まれた作品をあわせて鑑賞することで、新たな発見が生まれるのではないかと考えています。

青山における企画展では「花」「生き物」「月」をテーマにした俳句や絵画作品を四季の順にご紹介しています。また、最後には、芭蕉の代表作『奥の細道』をテーマに構成しました。

伊賀市が誇る芭蕉と穂月明作品の世界観を二施設の特徴を活かして鑑賞していただける機会となることを祈念しています。

最後になりましたが、今回の合同企画展の開催にあたり、多くの方々のご指導、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

二〇二四年一月

芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎

松尾芭蕉 四時を友とす

松尾芭蕉（二六四四〜一六九四）は、現在の伊賀市で生まれ育ち、全国を旅して俳句を作った詩人です。ふるさと伊賀には家族や門人がいて、芭蕉は生涯伊賀を大切にしてきました。

芭蕉が残した言葉はたくさん知られていますが、そのうちの一つに「四時を友とす」というものがあります。芭蕉の紀行文『笈の小文』の冒頭に書かれる文章のなかで、「四時」つまり、四季に親しんで俳句を作るのがよい、と書かれています。

穂月明 四季を愛した画家

穂月明（一九二九〜二〇一七）が育った故郷は山と海に囲まれた自然豊かなところでした。文人に憧れ水墨画を始め自分の画室を持てるようになって、無為自然な生き方を求め伊賀に移り住みました。そして現役最後となった個展「流水頌歌」の挨拶文の中で、

四季の中の山と、川の流れと、海。其処に生きる様々なもの、本当に美しい。それを贅<sup>た</sup>える水墨画を共感して観て下されば幸甚<sup>こうじん</sup>です。

と語っている通り四季を通じて花や風景をたくさん描き残しました。絵の讀に好んで引用した和歌の一つに道元禪師の「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて、冷しかりけり」があります。作者の自然に対する姿勢を表したものと言えるでしょう。

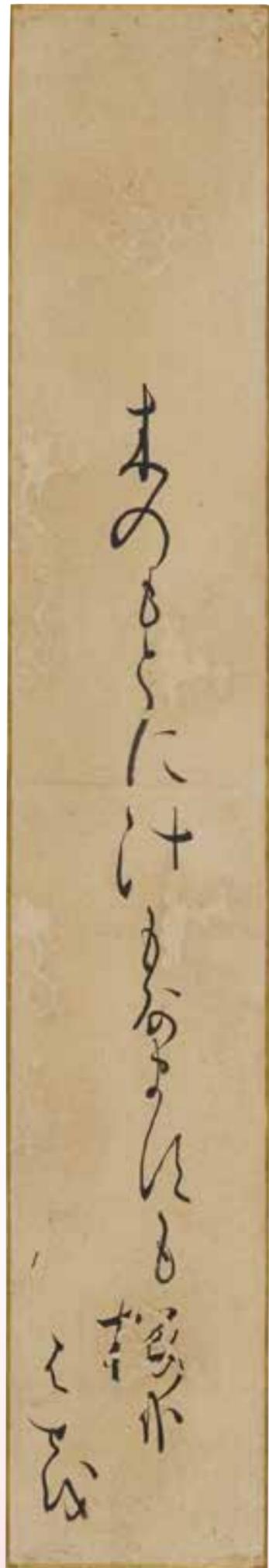
凡例

・本図録は、芭蕉翁生誕三三〇年を記念し、伊賀市の二施設、芭蕉翁記念館と伊賀市ミュージアム青山讃頌舎による合同企画展の展示解説図録である。ただし、掲載されている資料は展示作品のすべてではなく、また、各施設において展示されていない作品もある。  
・当企画展は、芭蕉翁記念館学芸員高井悠子と伊賀市ミュージアム青山讃頌舎学芸員穂月大介が企画し、図録の編集も行った。  
・芭蕉の時代には「俳句」という言葉は使用されないが、わかりやすさを優先し全体として「俳句」という言葉を用いた。  
・俳句の本文や解説文は、展示作品に拠りつつ、適宜読みやすいように表記を改めた。

木のもとに汁もなますも桜哉

元禄三年（一六九〇）、四十七歳の時帰郷した芭蕉が、伊賀の門人に花見に招かれて詠んだ句。芭蕉の晩年の境地「かるみ」を表した句としても有名です。花見のご馳走に桜の花びらが降り積もります。

芭蕉筆「木のもとに」発句短冊



穂月明作 桜雀

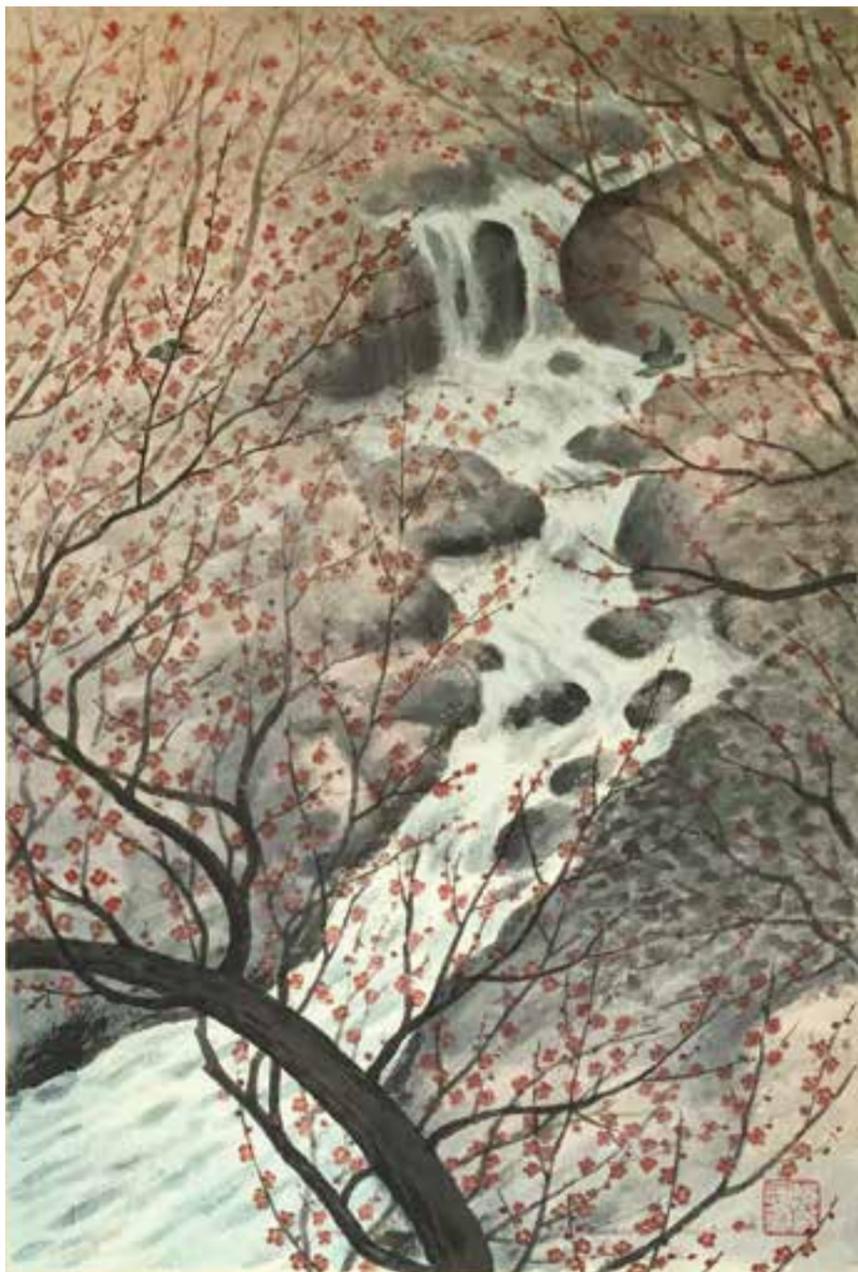
桜の下、雀が蝶を捕まえようと  
しています。いずれ雀も鷹に捉  
えられ、桜もやがて散ります。  
全ては移り変わりますが、それ  
故に世界は美しいのです。

山里は

まんざい  
乃歳おえし

梅の花

元禄四年（一六九二）芭蕉が四十八歳のときの句。梅の花が咲き誇るふるさと伊賀の穏やかな新春の景色を詠んでいます。「まんざい」とは、年のはじめに繁栄を祝って家々を踊ってまわる人々のことです。山里なので訪れが遅くなったようです。



穂月明作 溪流梅花

梅は春を告げる花。溪流を覆い尽くす紅梅の絵からは、清らかな梅の香りがあふれてきそうです。

初桜

折りしもけふは

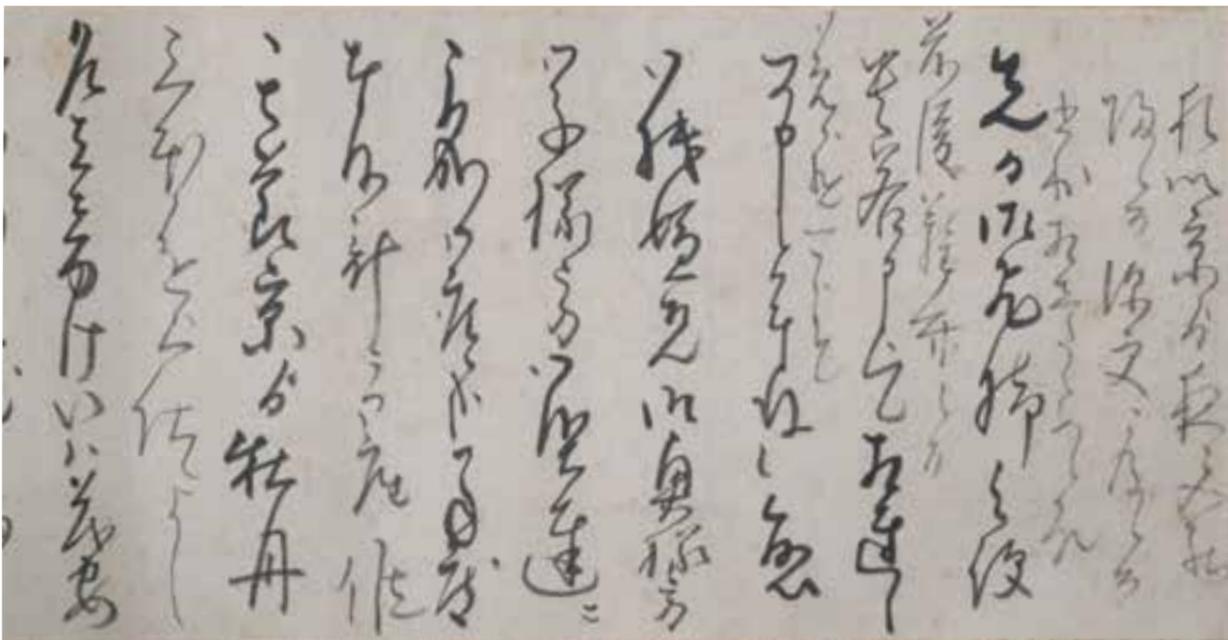
よき  
能日なり

元禄元年（一六八八）芭蕉が四十五歳のときの句。ふるさと伊賀の句会の席で詠まれました。待ちに待った桜の花が咲いたよろこびと、その日に句会を催すことができたお祝いの気持ちを表しています。



穂月明作 山家春景

庭の桜を見に出してきたおじいさんにおばあさんが何か声をかけています。平和なよき日です。



芭蕉筆「牡丹のたより」  
元禄四年九月二十三日付芭蕉筆  
中尾源左衛門・浜市右衛門宛書簡  
芭蕉が近江の義仲寺の庵から、伊賀の人々へ送った手紙。珍しい牡丹の品種の調達について書かれているため「牡丹のたより」とも呼ばれています。



穂月明作 富貴花 (牡丹)

穂月明作 蝶と紅白牡丹  
牡丹は夏を彩る百花の王。風格ある紅白の牡丹に黒い蝶が遊びにきています。蝶はその場に気品を与えるだけでなく、親しみも感じさせます。

寒からぬ  
露や牡丹の  
花の蜜

元禄七年（一六九四）、芭蕉が五十一歳のときに、門人の新築祝いとして贈った句。牡丹の蜜を、「露」になぞらえています。新しい家のおかげで露に濡れずに安心して過ごせますね、と詠んでいます。この句は、もともと牡丹の絵に添えて贈られました。



あじさい  
紫陽草や

敷を小庭の  
べつざしき  
別座敷

元禄七年（一六九四）、芭蕉が五十一歳の旅立ちに、江戸の人々との別れの席で詠んだ句。母屋から離れた静かな座敷から、敷をそのまま庭にし、たさやかな庭の紫陽花を愛でていきます。



種月明作  
鉢中の天・月光金魚  
金魚の泳ぐ団子鉢が雑草の生えた庭に置かれています。紫陽花が咲く、ささやかに静かな庭の家の玄関先には、こんな金魚鉢があつたかもしれません。

讚  
不除庭草留生氣  
愛養盆魚知化機  
庭草を除かず生氣をとどめ  
盆魚を愛養し天地の働きを知る

山中や

菊はたおらぬ

湯の匂

元禄二年（一六八九）、芭蕉が四十六歳のときに、「奥の細道」の旅の途中で詠んだ句。山中温泉に立ち寄った際、その温泉の香りのよさを句に詠みました。長寿の薬といわれる菊を手折るまでもないとほめています。この温泉の宿の主人が幼かったことから「菊慈童」を想像したようです。



種月明作 菊慈童  
かわいらしい菊慈童に、ほほえましい気持ちになり寿命が伸びそうです。

讚（現代語訳）  
『風俗通』曰く南陽郡の酈県には甘谷があり、その谷の水は甘いという。その山の上には大きな菊の花があり、谷に水が流れる時にその菊のエキスが流れ込む。その谷に住み谷の水を飲んでいく三十余の家では、長生きの者は百二十から百三十歳、普通でも百歳の寿命となっており、七十歳・八十歳で死んだ者は早死にと言われるほどだった。

※『風俗通』後漢末の応劭の著作。さまざまな制度、習俗、伝説、民間信仰などについて述べた書物。



穂月明作 十二支

水仙や  
しろき障子の  
ともうつり

元禄四年（一六九二）、芭蕉が四十八歳のとき、熱田を訪れた際の句。泊まった宿の障子の白さと水仙の白さが響き合っています。



穂月明作 水仙

水仙は、寒いなか凛と咲く姿と、香が好まれます。部屋にそっと飾られた水仙からはその芯のある強さが感じられます。

# 我ためか鶴はみのこす芥の飯

せり

芭蕉が四十代のころの句。「鶴が私のために野の芹を残してくれたのか」と詠んで春の七草の一つである芹を炊き込んだ飯を食べた喜びを表しています。隠逸のイメージがある鶴は杜甫の漢詩にもあるように、芹を好んで食べるとされています。

## 穂月明作 旭日鶴舞図

雪のなか朝日に舞う鶴を描いた縁起のよい作品です。ころなしが、鶴の足取りも軽そうです。



# 古池や かわず 蛙 飛こむ 水の音

貞享三年（一六八六）、芭蕉が四十三歳のときの句。芭蕉の代表作として有名です。江戸の人々と「蛙合」という蛙の句を比べ合った句会で披露されました。

## 穂月明作 蛙

水に浮いて脱力した蛙は、可愛く優雅です。あるがままの生き物の姿を愛した画家穂月明の眼差しが感じられます。



この  
此梅に

牛も初音と

なき

鳴つべし

延宝四年（一六七六）、芭蕉が三十三歳のときの句。梅といえば鶯ですが、ここでは天神に縁のある牛が詠まれています。春を告げるものとして、鶯だけでなく牛まで春を寿いでいるようです。



種月明作 梅牛図

黒牛の存在感が際立ちます。その表情はおだやかで、紅梅の枝とあわせのどかな春の雰囲気満ちています。口元を見るとうやら牛は鳴いているようです。

年々や猿に着せたる猿の面

元禄六年（一六九三）、芭蕉が五十歳のときの句。新年の猿回しで、猿が猿の面を付けておどる様子を詠んでいます。毎年同じことを繰り返す人間の愚かさにも思いを馳せた句です。



種月明作 桜花弧猿図

桜の木に座る猿。枝をつかみ他の枝に移り飛ばうとし、ふと下のほうを見てやめたようです。何をみているのでしょうか。

山は猫

ねぶりていくや

雪のひま

芭蕉が三十代のころの句。春先、雪が溶け始めて、まだらになっていく様子を詠んでいます。猫が体を舐めるように、山も自身を舐めて雪を溶かしたのかと想像しています。この山の名前は「猫山」でした。



穂月明作 母子猫

身近な猫のくつろいだ様子が描かれています。新たな命が育まれるあたたかな春の日が想像されます。

すずめこ

雀子と

声鳴かはす

鼠の巣

いつ詠んだかわかりませんが、身近な小さな生き物を詠んだ句です。雀の雛の声に応えるように鼠の鳴き声がする、のどかな春の風景を句にしています。



穂月明作 風雀図

たよりなげな雑草が風に揺られ、雀も風に流されるように飛んでいます。小さな体で強い風を味方につけて飛ぶ雀が健気です。

かたつぶり  
 つの  
 角ふりわけよ  
 須磨明石

貞享五年（一六八八）、芭蕉が四十五歳のとき、「笈はなの小文」の旅の途中で、須磨・明石を訪れた際の句。この地は『源氏物語』に「明石の浦はただ這ひ渡るほどなれば」とあることからカタツムリを連想したようです。



穂月明作 渚

海に突き出た岩の上に鶴が一羽止まっています。穏やかな夏の海です。砂浜の彼方にはうっすらと半島が見えます。須磨・明石は光源氏流謫の地。やや曇りがちな空はその心情を写しているようです。

さざれ蟹  
 足はひのぼる  
 清水哉

芭蕉四十代のころの句。さざれ蟹は小さな沢蟹。涼むために清水に足を浸していると、沢蟹がのぼってきた、と詠んでいます。夏の旅の涼し気なひとときが想像されます。



穂月明作 鉢中の天・カニ

ねこじゃらし（狗尾草）の下の沢蟹の丸い甲羅が印象的です。流れのない鉢の中で沢蟹ものんびりしています。

枯枝に  
鳥のとまりたるや  
秋の暮

延宝八年（一六八〇）、芭蕉が三十七歳ごろの句で、芭蕉自身が絵を添えた作品があります。句の表現や解釈についてはさまざまな意見がありますが、秋の物寂しさを表した句と考えられます。



**穂月明作 鳥と湖**  
湖畔の松に一羽の鳥がとまっている。さざ波の向こうの霧がかかると島を見つめ、寒そうに身をすくめているようにもみえます。

びいと啼なく  
しりごえ  
尻声かなし  
夜の鹿

元禄七年（一六九四）、芭蕉が五十一歳のとき、奈良の猿沢の池のほとりて詠んだ句です。鹿は秋の季語。秋の夜に響きわたるつま恋の聲が悲し気であることから、和歌や俳句に詠まれてきました。



**穂月明作 鹿御堂**  
奈良興福寺の北円堂でしょうか。牡鹿と雌鹿がお堂の仏さまに見守られているようです。

しろずみ  
白炭や

彼のうら島が

おい  
老の箱

芭蕉が若い時の句。白炭は冬の季語で、  
椿や躑躅などの小枝を焼いて、白炭に  
したもので、茶の湯の席でよろこばれ  
ました。芭蕉は白い炭から、玉手箱を  
あけて白髪になった浦島太郎を連想し  
たようです。



種月明作 浦島の子  
浦島太郎が玉手箱を開け、  
その煙の先には亀が竜宮城  
に帰っていきます。浦島太  
郎の視線はその亀を追いつ  
がっているようです。海の  
彼方に消え去る亀が人間と  
の距離を象徴しているよう  
です。

みつけ  
鷹一つ見付てうれしいらご崎

貞享四年（一六八七）、芭蕉が四十四歳のとき、渥美半島の先にある伊良湖崎に  
門人の杜国を訪ねた際の句。荒涼とした海上に二羽飛ぶ鷹の姿に杜国の姿を重  
ね、再会できた喜びを表しています。



種月明作 遠く鷹  
枯れ木の上を鷹が旋回しています。  
静まり返った冬、寒空を孤高に飛  
ぶ鷹に生命力を感じます。

草枕  
 しぐる  
 犬も時雨るか  
 夜の声

貞享元年（一六八四）、芭蕉が四十一歳のとき、「野ざらし紀行」の旅で名古屋を訪れた際の句。時雨は初冬に降るにわか雨のことで、芭蕉が特に大切にされた景色です。旅人の芭蕉と同じく、犬も時雨を浴びているのか、と旅の趣を味わっています。



種月明作 雨の村落  
 雨の中、村の道を2匹の犬がトボトボと歩いています。空はいまにも時雨があたりそうな明るさ。冬の冷たい雨を描きながら、絵からはあたたかな世界観が伝わってきます。

初しぐれ  
 こみの  
 猿も小蓑を  
 ほしげなり

元禄二年（一六八九）、芭蕉が四十六歳のとき、「奥の細道」の旅を終え、伊賀へ帰ってくる際に詠んだ句。旅に情趣を添える初時雨のなか、猿も小蓑を着て旅をしたいのだろうか、と猿を風雅を愛する同志として見つめています。



種月明作 十二支・申  
 十二支色紙の1枚です。猿が縁起の良い桃を持って迎えてくれているようです。

花の顔に

晴れうてしてや

朧月

芭蕉が若いときの句。「晴うて」とは晴れやかさに気後れすることです。桜の花を美女にたとえ、月が桜に気後れして朧に霞んでいる、と春の月を詠んでいます。



種月明作 月明遊亀

手をうてば木魂こだまに明る夏の月

元禄四年（一六九二）、芭蕉が四十八歳のとき、嵯峨嵐山で過ごした際に詠んだ句。明け方の月を待ち、柏手を打つと同時に夜が明けていく情景が詠まれます。夏の月は、夜が短いため美しさが十分楽しめないものとして詠まれました。

種月明作 月夜鎮守社



名月や  
池をめぐりて  
夜もすがら

貞享三年（一六八六）、芭蕉が四十三歳のときの句。深川の芭蕉庵で、月を見ながら池をめぐっているうちに夜通し過ごしてしまつたと、池に映った月を愛でています。絵では池に映った月を水鳥が崩しています。



穂月明作 月の池

寺に寝て  
まこと顔なる  
月見哉

貞享四年（一六八七）、芭蕉が四十四歳のとき、「鹿島詣」の旅で根本寺を訪れた際の句。鹿島で中秋の名月を愛でるために企画した旅で、敬虔な気持ちで明るく澄んだ月を仰いでいます。月は秋の季語。古来、和歌においても、俳句においても、春の桜とともに大切にされてきました。



穂月明作 清光鐘声

# 月白き師走は子路しろが寝覚哉

芭蕉四十代のころの句。厳寒の澄み切った冬の空に浮かぶ十二月の白々とさえた月の清らかさを、孔子の門弟である子路の高潔さになぞらえています。月の白さと「子路」の音も響き合っています。



穂月明作 月光

## 『龍頭奥之細道』挿絵より

元禄二年（一六八九）、芭蕉は東北・北陸地方を巡り、多くの名句を残しました。五年後に『奥の細道』として紀行文にまとめ、以後、多くの人々に愛される作品になりました。

— 旅立ち —

行者や

鳥啼魚の

目は泪



— 松島 —

鳥々や

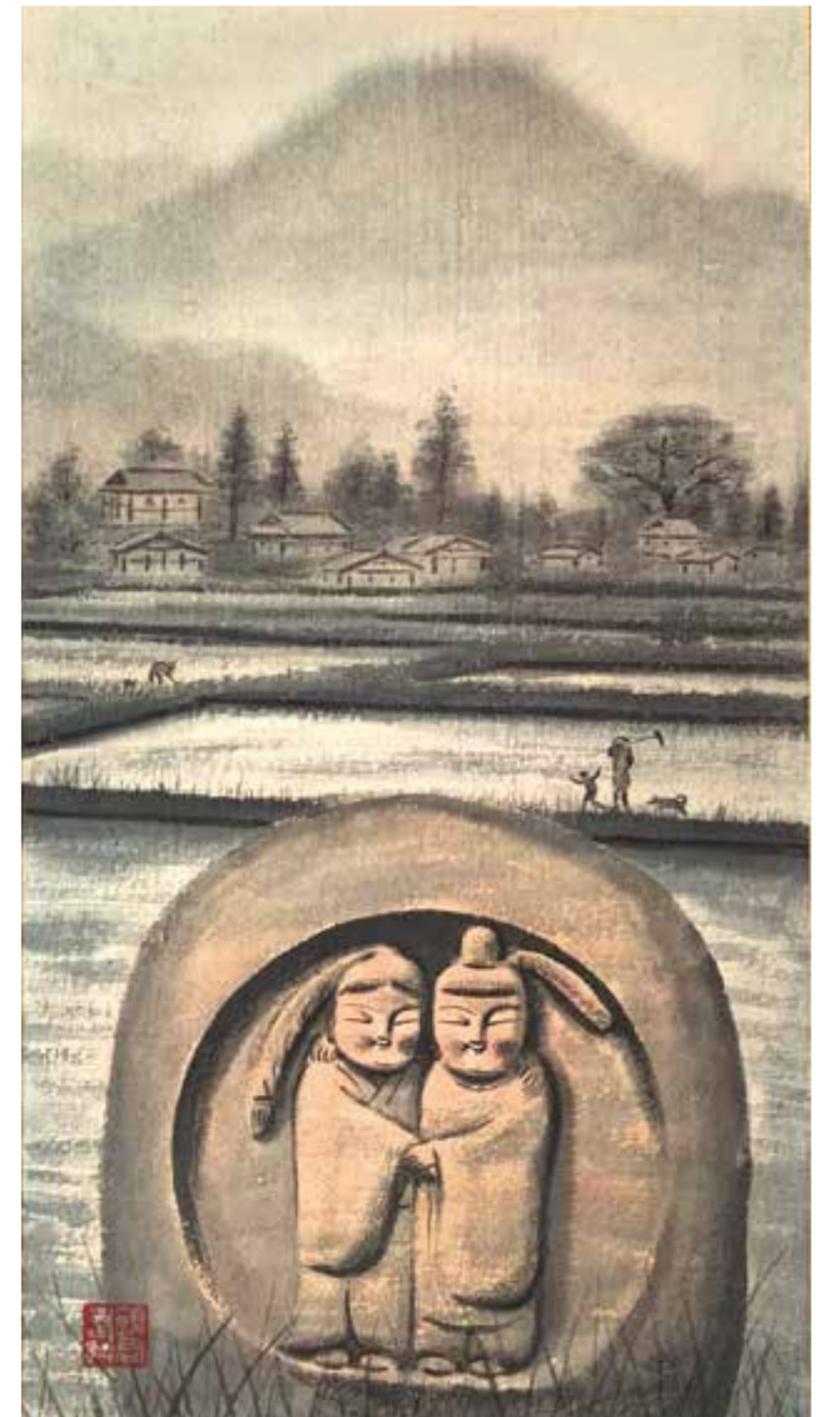
千々にくだきて

夏の海



風流の  
はじめ  
初やおくの  
田植うた

四月に須賀川を訪れ、現地の風景を詠  
みました。初めて聞く陸奥の田植歌に  
趣きを感じ、これから始まる東北地方  
の旅に思いを馳せたようです。



穂月明作 夕陽道祖神  
信州かもつと北でしようか。道祖神の  
立つ田植え前の水田を親子と犬が楽し  
そうに歩いています。

おい  
笈も  
五月にかざれ  
かみのぼり  
紙幟

五月に医王寺を訪ね、源義経や  
弁慶の笈を拝んだときの句。五  
月五日の端午の節句にあわせて  
飾っておくれと、歴史のなかで  
散っていった武人を偲んでいま  
す。芭蕉の時代には鯉のぼりは  
なく、紙に武者絵などを描いて  
飾っていました。



穂月明作 山家鯉のぼり

しずか  
閑さや岩にしみ入蝉の声  
いる

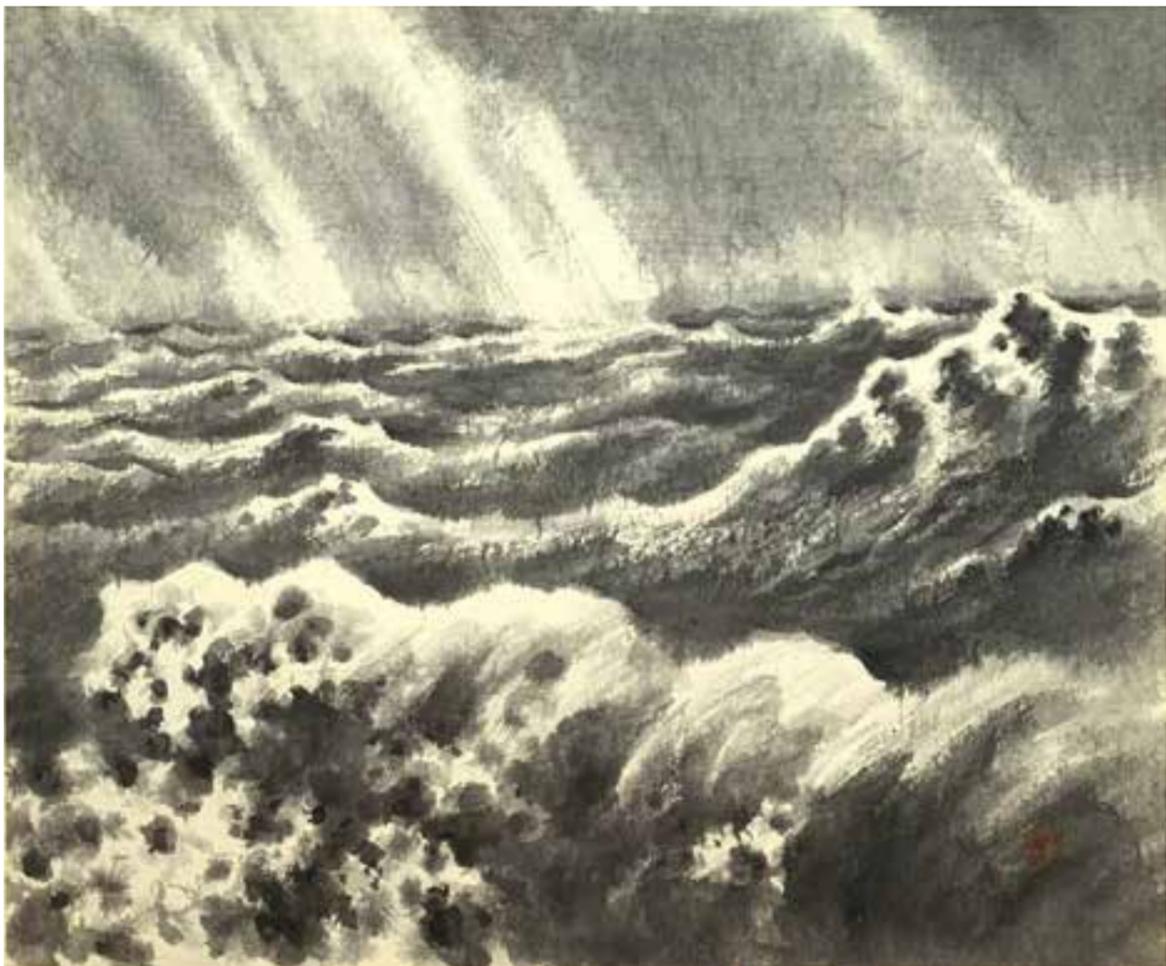
五月に立石寺を訪れたときの句。『奥の細道』のなかでも有名な句の一つ。  
蝉の鳴き声が山寺の閑さを際立たせています。



穂月明作 山寺清浄

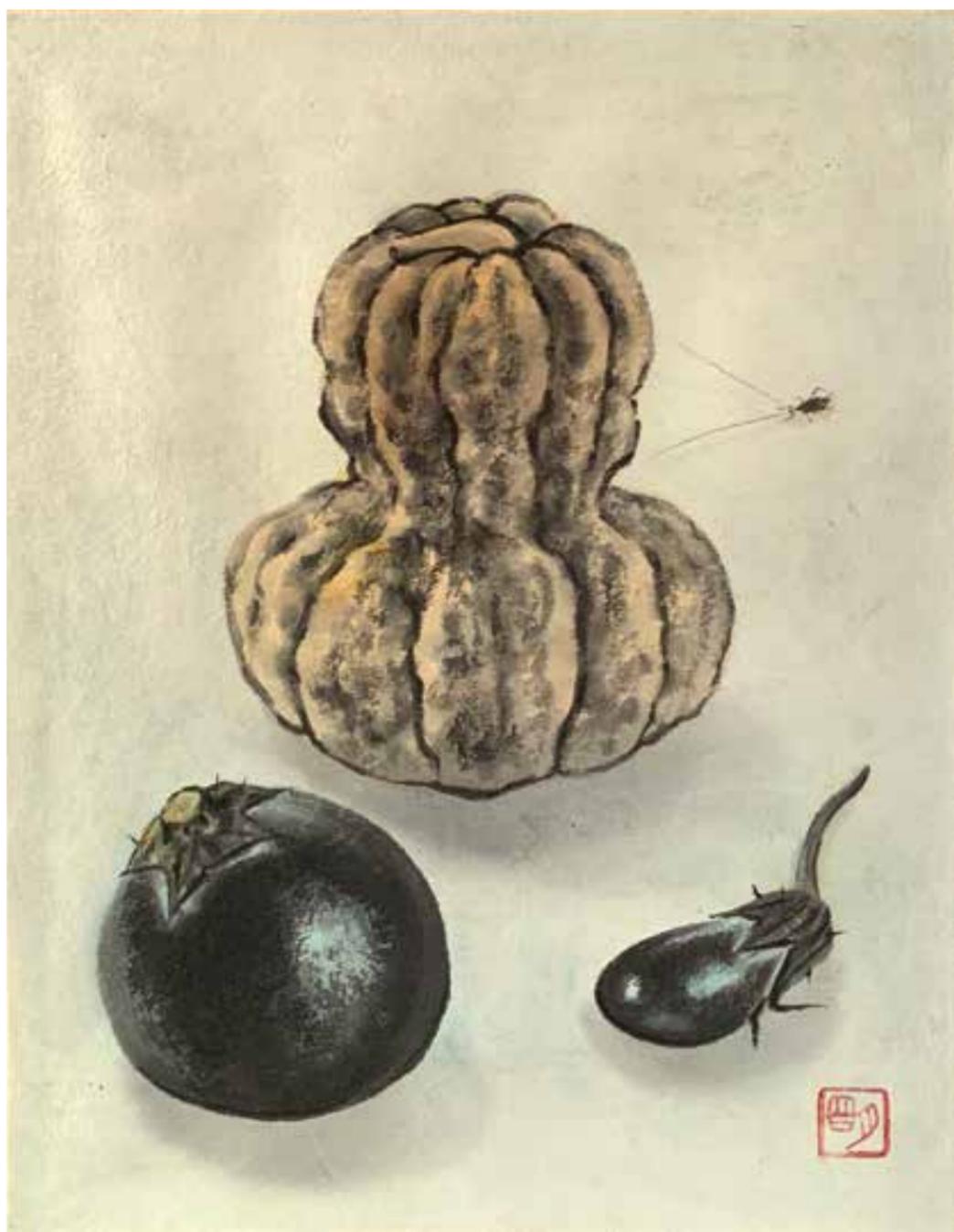
荒海や  
佐渡によこたう  
天河

七月、七夕のころ日本海を見て詠んだ句。  
この句をしたためた芭蕉自筆の作品が複数  
知られ、当時から人々に愛された句であっ  
たことがわかります。荒々しい日本海とそ  
の空全体に広がる天の川を詠みこむ、ス  
ケールの大きな作品となっています。



穂月明作  
波濤・佐渡冬図

穂月明が地名をタイトル  
に入れることは稀ですが、  
この絵には佐渡とありま  
す。佐渡といえは荒海  
芭蕉の句が頭にあったこ  
とでしょう。



秋涼し  
てごと  
手毎にむけや  
うりなすび  
瓜茄子

七月、金沢を訪れたときの句。人々のもてなしとして出された瓜や茄子を手で剥き食べる様子を詠んでいます。心身ともに厳しい旅のなか、ほっとするひとときであったこととてしよう。

穂月明略歴

- 昭和4年 和歌山県高野山に生まれる
- 昭和8年 愛媛県東予市の実報寺で少年時代を過ごす
- 昭和28年 京都市立美術大学洋画科（現京都市立芸術大学）卒業
- 昭和29年 京都醍醐寺に居住、結婚
- 昭和33年 京都市立美術大学日本画専攻科修了
- 洋画と日本画の基礎を学ぶ。卒業間近に、中国清時代の画家、金冬心の画集を見て深い感銘を受け、それまで学んだ画法から全く離れて独習により水墨画の道に入る
- 以来、師にもつかず、いかなる流派にも属さず、水墨表現を独習、作品発表はもっぱら個展による
- 昭和46年 第1回山種美術館賞展（山種美術館主催）「鉢中の天」入選
- 昭和56年 現在の伊賀市阿保地域に移り住む
- 昭和63年 西宮市大谷記念美術館買い上げ
- 平成1年 『穂月明水墨画集』（京都書院）刊行記念に「画業35年―墨彩の世界―」展を池袋アート・フォーラムに於いて開催
- 平成2年 新宿伊勢丹にて于右任・穂月明「書と画」二人展
- 大阪上本町近鉄百貨店に於いて「穂月明水墨画展」開催
- 平成4年 西武アート・フォーラムに於いて「穂月明墨彩展」開催等々、全国で個展多数開催
- 平成10年 大本山増上寺（東京都芝公園）増上寺会館「格天井画」作成
- 平成28年 「青山讃頌舎美術館 日月舎」開館
- 平成29年 4月15日死去
- 令和2年 6月3日伊賀市立の公共施設として伊賀市ミュージアム青山讃頌舎を開館

作品名	作者	所蔵	掲載頁
四季流水貼雑屏風	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	1・2
「木のもと」発句短冊	松尾芭蕉	伊賀市	3
桜雀	穂月明	(二財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	4
溪流梅花	穂月明	(二財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	5
山家春景	穂月明	(二財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	6
「牡丹のたより」	松尾芭蕉	(公財) 芭蕉翁顕彰会	7
富貴花	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	7
蝶と紅白牡丹	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	8
鉢中の天・月光金魚	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	9
菊慈童	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	10
水仙	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	11
十二支	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	12
旭日鶴舞図	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	13
蛙	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	14
梅牛図	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	15
桜花狐猿図	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	16
母子猫	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	17
風雀図	穂月明	伊賀市	18
渚	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	19
鉢中の天・カニ	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	20
鳥と湖	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	21
鹿御堂	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	22
浦島の子	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	23
邁く鷹	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	24
雨の村落	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	25
十二支・申	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	26
月明遊亀	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	27
月夜鎮守社	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	28
月の池	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	29
清光鐘声	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	30
月光	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	31
『鼈頭奥之細道』	芭蕉翁顕彰会	(公財) 芭蕉翁顕彰会	32
夕陽道祖神	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	33
山家鯉のぼり	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	34
山寺清浄	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	35
波濤・佐渡冬図	穂月明	(一財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	36
茄子・南瓜	穂月明	(二財) 東洋文化資料館青山讃頌舎	37

芭蕉翁生誕三八〇年記念  
芭蕉翁記念館・伊賀市ミュージアム青山讃頌舎  
合同企画展図録「絵が先か、俳句が先か」

発行日  
令和六年一月六日

編集  
芭蕉翁記念館（伊賀市）  
伊賀市ミュージアム青山讃頌舎

デザイン  
穂月 萌

発行

公益財団法人伊賀市文化都市協会  
〒五一八・〇八〇九  
三重県伊賀市西明寺三二四〇番地の二  
☎〇五九五・二二・〇五一二

印刷  
上野印刷（株）

芭蕉翁生誕三八〇年記念

芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎 合同企画展

# 俳句が先か、 絵が先か

— 芭蕉翁記念館 —



芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎

芭蕉翁生誕三八〇年記念

芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎 合同企画展

# 俳句が先か、 絵が先か

— 芭蕉翁記念館 —



芭蕉翁記念館

伊賀市ミュージアム青山讃頌舎